



# 亜熱帯の沖縄島を歩く


奈良教育大学教授 岩本廣美

日本列島の南方に位置する沖縄島は、冬でも暖かい亜熱帯地域です。『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』（以下、地図帳）p.66に掲載の主題図③「2月の気温のようす」（図1）を見ると、鹿児島県から沖縄県にかけての島々がオレンジ色で表されていて、2月の平均気温が12℃以上または15℃以上であることがわかります。グラフ⑥「気温と降水量」（図2）では、那覇市の1月の平均気温が16～17℃であることも読み取れます（注）。

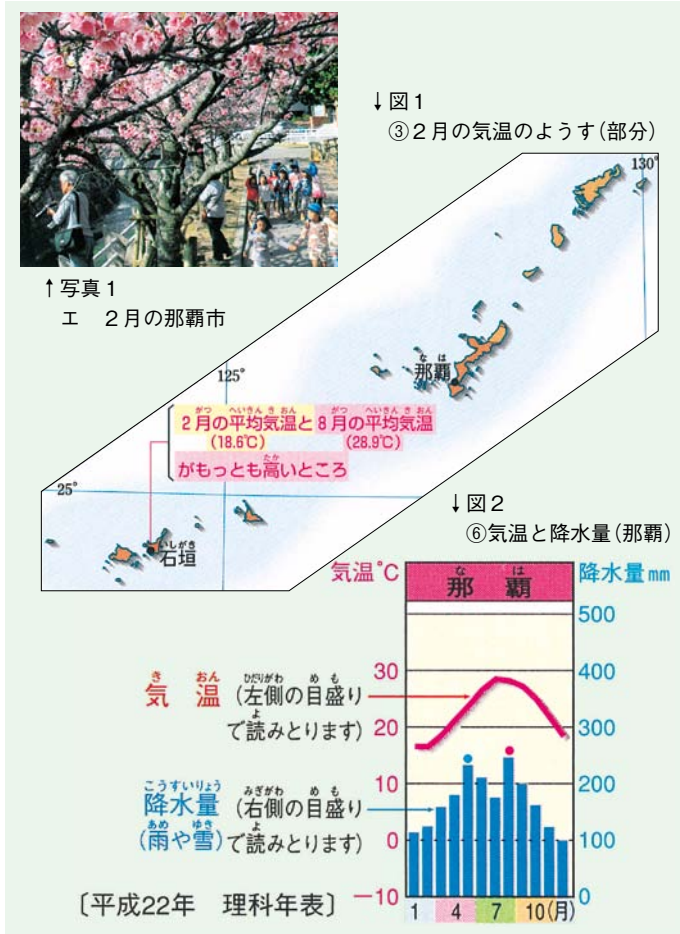
今回の地図歩きでは、沖縄島（図3）を訪

ね、本部半島方面の地図（図4）を見ながら、亜熱帯の地域の様子を探っていきます。

## サンゴ礁の海

図4では、まず、海の沖合に、陸地を赤く縁取る記号  が見られることに注目します。これは、海の浅い部分がサンゴ礁で覆われていることを示す記号です。

サンゴ礁とは、熱帯・亜熱帯の浅い海域で育つサンゴという生物の遺骸が海底で岩石化したものです。サンゴ礁では、現在もサンゴ



→ 図4 ③ 沖縄島の本部半島方面拡大図



が多数生息している場合があります、そうした海では、魚類をはじめ生き物が豊富です。

サンゴ礁は、上空から見ると、周囲の深い海に比べると白っぽく見えますが、地図帳p.13の南鳥島の写真は、そうしたサンゴ礁の具体的イメージをよく伝えてくれています。

地図帳p.15に掲載されている鹿児島県から沖縄県にかけての主要な島々の拡大図②③④⑤を見ると、これらの海域に浮かぶ多くの島々の周囲がサンゴ礁で覆われていることが読み取れます。

今回訪ねている本部半島の周囲の浅い海域は、ほとんどサンゴ礁で覆われていて、日本でも有数のサンゴ礁が豊かな海域のひとつといえそうです。本部町の海岸付近に、沖縄美ら海水族館が設けられたのも、本部半島の自然的特性によるものと思われる。

## 亜熱帯の気候を生かした農業

図4で、次に、本部半島の土地利用のようすを見ていくと、本土に多い水田ではなく畑が中心であることがわかります。果樹園も見られます。本部半島では農業がさかんに行われていることが想像できます。

作物のイラストから、本部半島のおもな作物は、きく、さとうきび、パイナップルであることが読み取れます。ただし、本部半島方面では、実際には、さとうきび畑、きく畑、パイナップル畑などが混在しており、イラストで示された作物は、本部半島全般で見られる点に注意しなければなりません。

さとうきびとパイナップルは、冬に気温の下がる地域では栽培が困難な作物であり、亜熱帯の気候を生かした作物の典型です。しかし、きくは、本土でも愛知県の渥美半島をはじめさかんに栽培されていて、亜熱帯地域に

特有のものではありません。

にもかかわらず沖縄島できくをさかんに栽培する理由は何でしょうか。

それは、本土のきくが、露地栽培の場合、秋から冬にかけて出荷されるのに対して、本部半島など沖縄島で栽培されるきくの多くが、冬から春にかけて本土に出荷できるという有利な点があるからです。本土のきくの出荷が減る頃から沖縄島のきくの航空便による出荷が本格化し、春頃まで続くのです。本土での空白期を埋めるこうした農業は、冬でも暖かい沖縄島だからこそできることです。

## 世界遺産・今帰仁城跡

図4で、今度は、世界遺産の記号に注目します。今帰仁村には、世界遺産に登録されている今帰仁城跡があります。地図帳p.15の③沖縄島(図3)を見ると、沖縄島全体には、首里城跡をはじめ世界遺産に登録された文化財が計9か所あることがわかります。これらは、本土とは異なった歴史や文化が亜熱帯の風土のもとで栄えてきた証拠です。今帰仁城は、13世紀から15世紀にかけて繁栄した沖縄島北部の地域の拠点だったところでした。

今帰仁城跡では、1月下旬から2月上旬にかけての時期に「今帰仁グスク桜まつり」が開催されます。沖縄島のさくらの開花時期は本土とは異なり、1月から2月にかけての時期です(写真1)が、このことも亜熱帯の地域ならではのことといえそうです。

\* \* \*

地図帳p.15の拡大図とp.66の資料を丹念に見ていくことによって、亜熱帯の沖縄島でさまざまな発見がありました。こうした見方が、地図帳のさらなる活用の一助になれば幸いです。

注：ケッペンの気候区分によれば那覇市の気候は温帯に分類されますが、最寒月の気温が比較的高いため、本稿では亜熱帯としました。